別紙様式３

平成２０年度　博士前期課程学位論文要旨

学位論文題名（注：学位論文題名が欧文の場合は和訳をつけること）

訪問リハビリテーションにおけるＯＴの役割に関する研究
―語りにおけるＯＴとＰＴの臨床的判断の比較を通して－

学位の種類：　修士（　作業療法学　）
人間健康科学研究科　博士前期課程 人間健康科学専攻　作業療法科学系
学修番号　07896603
氏　名：　河渕　緑
（指導教員名：　菊池　恵美子　）

【はじめに】

本研究の目的は訪問リハビリテーション（以下訪問リハ）におけるＯＴとＰＴの臨床的判断の語りからその共通性と相違を分析することで，ＯＴの役割を明確にすることである。

【方法】

同一の利用者に訪問リハを実施している臨床経験２年以上，訪問リハ経験１年以上のＯＴ6名，ＰＴ6名に半構造化質問形式の個別面接を行い，そのデータを修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下ＭＧＴＡ）にて分析した。

【結果と考察】

１．対象者の概要：分析対象者の性別はＯＴ・ＰＴ共に男性３名女性３名，訪問リハ経験は，ＯＴは平均５年，ＰＴは平均4.3年であった。面接時間は平均51分であった。

２．ＯＴ・ＰＴの臨床的判断過程と結果図：ＭＧＴＡの分析ワークシートにより21の「概念」とその関係から“介入内容”　“達成目標”“心の促進過程”“行為の促進過程”の４つのカテゴリーが生成された。“心の促進過程”は“意欲の喚起”の臨床的判断過程と推測された。「できることの確認」は，訪問リハにおける中核の概念と推測された。

３．ＯＴの臨床的判断過程：ＯＴ特有の概念として，「やれそうな感覚」と「目標行動を引き出す会話」があげられた。これらの概念は，高次目標に位置づけられた家庭内での「役割づくり」や「社会参加」の達成には重要な概念であった。

１)「やれそうな感覚」:〔セラピストは，その活動の必要性と目的及び価値に気付きを与え，実体験の中で本人の『したい』『やりたい』『やれそうな』を引き出す〕と定義づけられ，ＯＴ特有のものであった。「やれそうな感覚」は，「新たなニードの発見」から生活の場での「役割づくり」に結び付ける為に重要な概念であった。

２)「目標行動を引き出す会話」:〔セラピストが，対象者自身の社会参加や具体的な活動や生活の課題に対して関心を深めかつ目標行動を引き出すために行う会話〕と定義づけ，6名中５名のＯＴが語っていた。

４．ＯＴの役割：ＯＴは生活の場で実際の作業活動を利用者と共に行いながら，「目標行動を引き出す会話」を駆使し，人的・物理的環境を整え，生活の質のみならず人生の質にも関与する価値観や興味を刺激し，「自己の状況の意識」を改善し，緻密な段階づけと適切なタイミングで「やれそうな感覚」を引き出し，自己実現に向けて誘導することであった。

【まとめ】

ＭＧＴＡの分析により，ＯＴ・ＰＴの臨床的判断過程は４つのカテゴリーと21の概念が生成された。「目標行動を引き出す会話」と「やれそうな感覚」の２概念が，ＯＴ特有であった。ＯＴの役割は，「目標行動を引き出す会話」を駆使し，「やれそうな感覚」を育成して，新たな役割を持って生活が営めるように支援することであることが示唆された。